

D-4 戶外生活の場としての公園に関する研究—京都御苑について— その3
奈良女大家政 北口照美 小場京子 近藤公夫

目的 都市の高密化、住宅の狭小化などの住環境問題を前提に、市民の公衆戶外生活空間である公園緑地のあり方を、都市緑地の原点ともいえるべき京都御苑について考える。

方法 今回発表は、家政学会第30回大会で発表した京都御苑滞在者の分布実態をさらに分析すると共に、第29回大会で発表した利用者の意識問題を関係させ検討した。

結果 京都御苑の滞在者数で最大時は春秋1日目の15時で3000人。このとき全苑平均密度が40%強。分布の場所別では、運動広場に25%、草・芝生地35%、苑路25%、遊戯施設5%となる。一日の人数の変化は、運動広場は終日ほぼ一定、草・芝生地は、午後は午前の子倍となる。この草・芝生地の流動性は、近くの施設の利用状況に影響を受けるとも考えられ、検討を要する。次に、意識調査から利用者の希望施設として、幼少年は運動広場と遊戯場、青年は野球広場と休養芝生、壮年は静的雰囲気のある空間をあげている。この意識は前述の分布実態を裏づけている。また、来訪者の70%が京都市民であり、おおよそ京都域が誘致圏とな、ている。

これらのことから、京都御苑は市民生活に密着した緑地であることがうかがえ、伝統的な歴史・文化を背景に、今日的な空間機能を通じて都市公園の典型とな、ると考えられよう。

今後さらに、利用実態分析の深化により、住生活環境における公園緑地問題について、集成してゆく。